

いのちと勇気の手紙
「千の風になって」手紙のふるさと・西条市

「千の風」手紙プロジェクト 委員長 越智 将文



「千の風になって」のまちづくりの始まり

「私のお墓の前で泣かないでください」

この歌い出して始まる歌を皆さんはご存知でしょうか？

作家の新井満さんによつて訳詩・作曲され、西条市出身のテノール歌手・秋川雅史さんの歌唱により全国に広がった「千の風になって」です。

平成18年の大晦日、NHK紅白歌合戦での秋川さんの熱唱に、日本中が感動の渦に包まれました。そのような中、西条商店街の若

手有志が中心となり、

この歌の力で地元西条を盛り上げ、全国にアピールしたいと、平成19年8月に、『千



千の風になって競演フェスティバル



表彰イベントでの西条高校書道部によるオープニング

の風になってのまちづくり実行委員会」を設立し、「千の風になって」をテーマとしたまちづくりがスタートします。

設立当初の活動としては、「千の風になって競演フェスティバル」と題した音楽祭や声楽家の秋川暢宏先生（秋川雅史さんの父）の古稀を祝うコンサートを実施しました。

さらに、新井さんの協力を得て、今まで西条市と結びつきなかつた北海道七飯町（「千の風になって」名曲誕生の地）と新潟市（新井さんの出身地「千の風」のふるさと）との連携が芽生え、三市町が集う「千の風サミット」が開催されるなど、地理的広がりのある活動ができるようになりました。

「千の風になったあなたへ贈る手紙」事業開始のきっかけ

亡き大切な人への想いを綴った手紙を募集し、悲しみを乗り越えた力強い姿や家族の強い絆などを紹介することで、命の大切さを広く訴え、多くの人々に勇気や生きる活力を届けることを目的として、「千の風になったあなたへ贈る手紙」の募集が、平成21年に朝日新聞社・朝日新聞出版の主催で実施され、世界17か国から5056通もの手紙が寄せられました。

この時に応募のあつた手紙の原書が平成22年に西条市に寄託され、手紙事業を西条市が継承していきこ



届いた手紙の数々

この事業を市と実行委員会が連携して強く推進するために、手紙事業のシンボルとなる「白い羽のポスト」を多くの市民の方の



白い羽のポスト

寄附をもとに製作しました。白い羽のポストは、応募期間中は実際に投函できますし、西条図書館に常設されていますので、いつも図書館の来館者を優しく迎えています。

また、地域の代表的団体の参画を得て、共催市民団体「千の風」手紙プロジェクトを設立し、「官民協働」の形で、事業を推進していくための仕組みを構築しました。

主催者が一地方都市となり、応募数の大幅な減少が心配されましたが、第2回(平成25年)は1340通、第3回(平成28年)は1445通の手紙が届き、共催者として安堵し、大変嬉しく思っています。

手紙の持つ力

私自身、手紙よりも即時性で上回るFACEBOOKやLINEのようなSNSサービスで連絡を取ることが多くなりました。おそらく、多くの方がそう

ではないかと思っています。この状況から考えると、私もは時代と逆行したツールを用いて事業を行っているのかもしれない。

しかし、SNSにはない「ぬくもり」が手紙にはあります。手紙は、書く人の筆圧や文字の大きさなどで、その人の人柄が偲ばれ、相手に感謝や想いがより伝わりやすく、受け取る喜びもSNSでの文章に比べると格段に上がります。

この手紙事業は「亡き大切な人へ贈る」ことをテーマとしていますので、手紙が実際に届くことはありません。しかし、白い羽のポストを介して、作者と故人とを繋ぐ、「心の郵便」となっています。また、「書くことで気持ちの整理がつき、前向きになれた。」「書くことで、他人と悲しみを共有できた。」などの声もいただいています。

人の心を響かせるものは指標では測れません。成長から成熟の段階へ移行した現代社会では経済性だけでなく、感動や楽しさ、安らぎといった物事の質的な面に着目する定性的な観点が必要だと思っています。

事業の繋がりを未来へ

「千の風になって」のまちづくりは、西条をアピールする目的で始まりました。手紙事業をはじめ、様々な事業を展開していますが、東京で「西条って何県?どこにあるん?」という声はまだま

だよく聞きます。一方で、事業を継続しているおかげで、TV番組や雑誌で紹介されることも多くなりました。今後も各種事業を通じて、西条市の認知度向上に努めたいと考えています。

また、手紙事業には、作品選考やイベントの出演を通して、小学生から一般の方まで、多くの市民の方に関わっていただいています。自分が住んでいるまちを誇りに思うシビックプライドの醸成にも一役買えばと思っています。

東日本大震災以降、人と人を繋ぐ絆の大切さがよりクローズアップされていますが、手紙事業も作者と故人だけではなく、大切な人を亡くした人同士、事業を通して西条を知った人や事業に協力をしていただいた市民など、いろいろな繋がりが生まれています。

「亡き大切な人へ贈る」ことをテーマとしている独自性と生と死という人間誰もが必ず経験する普遍性とを活かし、これまでに生まれた繋がりを大切に、その時の時流に合わせて、形や規模を変えていきながら、絶やすことなく継続していきたく考えています。



市民選考説明会